学校運動部活動とジュニアユースチームの教育観の比較から考えるスポーツ育成年代の基盤とするべき教育観と双方の長所と短所から考える今後の関係構築の検討

太田達也　（　埼玉大学　）

１．目的

本研究の目的は、1998 年から 2018 年の間で行われたワールドカップサッカーにおける、サッカー男子日本代表の出身比率から明らかである学校運動部活動出身者の比率が、プロチームの下部組織であるジュニアユースチーム出身者の比率より高いという事実に基づき、学校運動部活動とジュニアユースチームを比較し、スポーツの育成世代における基盤となる教育観を考察することである。また、そこから得られた知見をもとに双方の今後の関係構築の検討を行うことである。

２．研究方法

先行研究、インタビュー、インターネット記事、雑誌、学習指導要領等の関連資料および文献の収集と検討を行った。

３．結果と考察

１）学校運動部活動の特徴

学校運動部活動は、自分の好きなものへの探求、生活態度、社会性、連帯感・責任感の涵養といった人間教育の育成を第一に、部活動の時間だけでなく、学校生活全体を通して取組んでいる。学習指導要領には、競技力向上についての記述は一切ない。

２）学校運動部活動の課題

学校運動部活動の指導について、管理、軍隊式といった強制された人間教育がみられる。また、学校運動部活動に所属している子選手達は全員が競技性を求めているわけではなく、所属している選手間で意欲の二極化がみられる。

３）ジュニアユースチームの特徴

ジュニアユースチームは競技力向上を第一に活動しており、指導者、練習環境などについては学校運動部活動と比較すると優れている。競技力向上を目指す上で必要な人間教育を積極的に行っている。その競技の上達を目的としている選手が集まっているため、意欲の高さがみられる。

４）ジュニアユースチームの課題

練習時間等でしか指導者と選手は顔を合わせる機会がなく、学校生活全体で人間教育を施すことができる学校運動部活動と比較すると、十分な人間教育を施すことができない。

４．結論

学校運動部活動とジュニアユースチームの双方は、人間教育の重要性を理解した上で指導を行っている。ただし、学校運動部活動では人間教育を第一に指導しており、そこがジュニアユースチームとの違いである。人間教育は競技に対する姿勢に直結すると考える。優れた環境、指導者より自分自身がその競技にどう取組むのかが重要であり、人間教育を行った上で競技力向上を目指すことがスポーツ育成世代における教育観として重要なのではないかと考えられる。

本研究では学校運動部活動とジュニアユースチームを比較して考えたが、双方には長所と短所があり、区別して考えるのではなく、お互いが補い合うことが重要であると考える。スポーツに競技性を求めるのか、遊技性を求めるのか、そこに優劣はなく、どちらも尊敬されるべきである。誰一人として阻害されることなく、多様な形でスポーツを楽しむことが出来る環境を双方が連携して作っていくことが重要であると考える。近年では、教員の労働時間の増加による働き方改革が起きていて、2023 年から部活動の地域移行について文部科学省から提唱されているが、まだ全国的な展開は至っていない。学校と地域との連携について、具体的で段階的な方策を検討することを今後の課題とする。

５．主な参考文献

１）立木宏樹（2018），学校運動部活動とクラブチームにおける「競技力育成」と「人間教育」をめぐる今日的諸相，九州体育・スポーツ学研究，第 32 巻（第 2 号），ｐ9-19.